

平成 19年 8月 17日

平成19年度 教師海外研修(ネパールコース)研修報告書

学校名 鳴門市立鳴門工業高等学校

担当教科 国 語

氏名 川村 美千代

1. 今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

- ・ ネパールの文化、習慣、生活の様子などを知る。(特に日本との違いに着目)
- ・ ネパールで活躍する協力隊の様子など、日本の支援の現状を知る。

2. 視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

それぞれの現場では質疑の時間が十分とれず、視察だけで概要をつかむことは困難だったと思うので、毎回、事前にある程度の説明をJICA職員の方がしてくださっていたことが、とても役に立った。予め、注目すべきポイントを絞っておくのにも有効で、有難かった。

通訳のお二方も、ネパールのことについていろいろと教えてくださり、移動中なども常に私たちの数々の疑問に答えてくださった。地元の人しか分からないことや、ネパール人の生の声を聞くことができ、とてもためになった。通訳という語学面の仕事だけでなく、本当にいろいろとお世話してくださったので、非常に感謝している。

ネパールの民族やカーストについては、多くの疑問が残ったままである。それに対するネパールの人々の意識が、どのようなものであるのかなど、ほとんど理解できなかった。

3. 教育指導への活用について

① 日本とネパールの違いを紹介(主にホームルーム)

(例) 水・トイレ・停電・食事・民族・交通・・・



日本の常識は世界の常識ではないことに気づかせ、価値観の多様化を図る。
恵まれた日本の環境を再認識させるとともに、先進国である日本が途上国から学ぶべき点についても考えさせる。

② 支援の現場を紹介(主にホームルーム)

学校・・・就学困難な子どもたちの現状。

ネパールの子どもの夢。



学ぶことの意義について考えさせる。

印刷・水・農業・・・日本の技術が他国に貢献。



自分たちが学ぶ技術に誇りを持たせる。
協力隊の生き方に学ばせる。ボランティア精神の涵養。
望ましい支援のあり方、適正技術の必要性などについて考えさせる。

③ 文化祭でネパール展(部活動)

ネパールで入手した物品や写真などを展示。

学校内だけでなく広く多くの人々にネパールの文化やJICAの活動について知ってもらう。



異文化理解を深めさせる。

世界に目を向ける姿勢を養わせる。

途上国援助について考えさせる。

資料2-2

4. 研修に関する全般的な所感／意見について

非常に濃密な10日間だった。学校現場に還元することが目的である以上、授業実践との関連を常に念頭においておかなければならず、見聞きしたことをどのように教育に生かせばよいのか、悩むことが多かった。そんな中、夜ごとのメンバー全員でのミーティングは、自身の考えをまとめていくのに有効だった。同じものを見ても、各々、感じ方、考え方が違い、それぞれの意見を交換できたことは、たいへん有意義であった。

わずかな期間で本当にさまざまな体験をし、多くを学んだので、伝えたいことが多すぎて授業に向けての整理が難しい。思い切ってポイントを絞り、生徒に与える情報の取捨選択をしなければならないだろう。工業高校である本校の生徒に、特に伝えたいことを意識していた中、最先端技術を追求することばかりが優れているのではないという考えが心に残った。技術支援の現場を紹介するにあたり、本校生にもそういう視野を持たせたいと思った。

同様に、今日の日本社会では、効率性や利便性、利潤ばかりを追い求めるあまりに、ゆとりが失われ、それが大きな事件や事故にもつながっている。途上国の人々の暮らしから学ばなければならないことは多いと感じた。

ネパールが今後、どのような発展を遂げるのか、非常に興味深い。街中では多くの人が携帯電話を片手に歩き、高級車を走らせる人もいれば、最新のコンピュータを所持する人もいる。一方で、手作業で行われる農作業、洗濯、進まないインフラ整備…。私は、経済的な発展が絶対だとは決して思わない。しかし、貧困解消のために現金収入は欠かせない。ネパール国家が進むべきベストな方向性を見出すことは、私には到底できないが、それは、ネパール国民が決めることだ。日本国には、これからもよりよい支援のあり方を模索しつつ、友好な関係を続けていってほしい。

今回の研修では、同行のメンバーをはじめ、多くの人々にお世話になった。それぞれの人々との出会いが、何よりも大切な財産になったと感じている。

5. JICA四国に対する要望・提言

安全面、日程面などを配慮した上での視察スケジュールだったと思われるが、カトマンズだけではなく、地方の生活や支援の現場も見てみたかった。そうすれば、より厳しい生活状況や、首都圏との相違などについても実感できたのではないかと思う。

ホームステイについて、これもコーディネイト上やむを得ないのだろうとは思っているものの、もっと庶民的な家庭で過ごしてみたかった。一般的なネパールの人々の暮らしを実感するには、あまりに豊かな家庭であったと思う。

各視察現場の隊員の方々からお話を伺う時間をもう少し持てればよかったと思う。視察時は、その場その場を見て回ることで精一杯で、どちらかというとなepalの人の思いや考えを聞きたいという気持ちが強かったが、振り返れば、日本人としての開発支援に対する思いや苦労などを、もっと聞いておけばよかったと思う。

以上、十二分に有意義な研修をさせていただきましたが、欲を言えば…の要望を挙げさせていただきました。

6. 今後の本研修参加者へのアドバイス

研修では、どんな時でもできる限りメモをとっておくことが大切。スケジュールが過密なので、次々と視察していくうちに、前のことを忘れてしまう。出来事だけでなく、その時々感じたこと、考えたことなどもメモしておくことで役立つ。

帰国後1～2日間ぐらい、可能ならば休日に！ 体力回復と、頭を現実に戻すのに、少々時間がかかったので、私の場合・・・。

資料2-3

7. 各訪問先の所感

日時	訪問先	発見したこと・学んだこと⇒それを何につなげるか？ その他所感
7/30 15:00	JICA事務所	マオイストの活動など近年のネパール情勢や、これまでの日本の支援などについて、よく分かった。貧困の解消やインフラ整備が目下の課題であると感じた。ネパール政府の理解や協力も不可欠だが、暫定政権である現在の政府が、今どの程度の機能を果たしているのか疑問。支援の拡大のためには、今後のネパール国家を支えていく人材育成もまた重要である。この日説明を受けたことと、実際に自分の目で見て感じたこととを、よく重ね合わせてみたい。
7/31 9:00	JICA事務所	これまでネパールに支援してきた人々のおかげで、今もネパールの人々が日本人に友好的であるのは大変喜ばしい。同様に、他の多くの国とも友好な関係を持つことができればよいと思う。 ネパールは国家予算の多くを外国支援で賄っているが、日本の生活も石油や食糧など、多くを他国に依存して成り立っている。日本は経済的に豊かな分を途上国へ還元すべき。 ネパールは識字率、就学率など非常に低い。貧困の再生産を防ぐためにも、教育支援は大切。日本の生徒には読み書きができないことの不自由さを考えさせたい。
12:30	カリキュラム開発センター	公立学校と私立学校にはかなりの格差がある。貧富の格差解消のためにも、すべての国民が平等な教育を受けられることは重要。他民族国家であるがゆえに、公用語であるネパール語以外にも100を超える言語が存在する。各民族の母語を尊重するため、それぞれの民族語で書かれた教科書も存在する。一方、私学では授業はすべて英語で行っている学校も多い。効率的な学習指導を展開することと、民族の伝統を守ることとの両立は難しいが、伝統を守ろうとする姿勢には学ぶべきものがある。

	14:00	国立教育開発センター	政府が教員の研修制度を勧めていることが分かった。教科指導の技術だけでなく、教師の人間的な資質を高めようとしている。しかし、研修中の教員の代替教員についてなど、現場が抱える問題は大きい。どこの世界でも上が考えることと現場にはズレがあるなあと思った。
	15:00	ジャナック教材センター 印刷工場見学	教科書についても公立と私立では格差がある。私立学校ではインド製のカラー刷りの教科書などを使用しているところが多い。ここで作られている教科書は公立学校用でカラーはなし。多くの印刷機が外国から設備投資されている。シニアボランティアの鈴木さんとお会いし、日本の技術が生かされていることを実感した。自己の経験を生かし、途上国の人々に貢献している鈴木さんの生き方を生徒に伝えたい。また、適正技術の必要性について考えさせられた。
8/1	10:00 11:30 13:00 15:00	ナバジヨディ初等学校 プルチョーキ初等学校 パタレチャップ初等学校 シッデシヨール 初等中等学校	各学校、予算が少なく不十分な教育環境の中にあって、生徒の笑顔は素晴らしかった。多くの生徒が教育の尊さを知っている。しかし、実際の生徒の出席率は悪く、就学困難な状況にある子どもがいかに多いかを物語っていた。軽食の支給、教授法の工夫など、学校側や先生方の努力も見ることができた。環境整備はもちろん重要であるが、教師の熱意が第一であることを再認識させられた。
8/2	9:00	JICA事務所	カトマンズの上水道の現状や水質の問題などについて、よく分かった。各プロジェクトの説明では、維持管理の問題など、さまざまな課題について考えさせられた。「水」という生活に不可欠なものに対して、なぜもっと市民の声が上がらないのか不思議に思う。国民の声が先にありきの支援という形が望ましいと感じた。また、統計により、日本がいかに贅沢に水を使用しているかを思い知らされた。生徒には、世界的な視野で水の問題を考えさせたい。
	10:45	マノハラ浄水場	水が濾過されていく様子がよく分かった。日本製品が多く目につき、ここでも日本の援助を実感。一方で、自立につながる支援の難しさについて改めて考えさせられた。従業員は全てネパール人だということだったが、ここで働く人々は水に対してどのような意見を持っているのか聞いてみればよかった。
	14:30	町中の伝統的公共水場	水場で出会った66歳のご夫婦が印象的だった。10年前にマオイストから逃れて郊外からカトマンズへ来たらしい。ご主人の腹部にはマオイストに撃たれた傷跡が残っていた。不安定な国の情勢や、毎日水を汲みにこななければならない苦労を実感するとともに、日本で平和で安全に暮らせることの有り難さを痛感。

8/3	11:00	非正規教育プロジェクト	<p>経済的問題や地理的問題、教師不足など、教育を受けることのできない子どもの現状がよく分かった。地方にはより過酷な状況があり、支援の必要性を感じた。訪問した学校では、生徒たちの歓迎ぶりに感激。これまで訪れた学校の中で最も厳しい環境で生活している子どもたちだと思われるが、その目は輝いていた。スタッフの方々の熱意も強く感じられた。援助に頼るのではなく、自分たちの力でプロジェクトを継続して実行していこうという姿勢が見られ、頼もしく感じた。日本の生徒には、ネパールの子どもたちのありのままを伝え、そこから何かを学びとってほしい。</p>
	17:00	ホームステイ	<p>ネパールでは上流と思われる家庭生活だった。ホストであるご主人は政府で結核対策の仕事をしていたということであるが、現在は退職されていた。20歳過ぎの2人のご子息は、共に上級の学校を卒業した後、長男は日本語学校に、次男はコンピュータの学校に通っている。それだけ学を積んでも、ネパールで仕事に就くのは難しいらしい。長男は日本に留学することを望んでいた。知識人の海外流出に歯止めをかけるためにも、雇用促進は最重要課題であると感じた。家族がどうやって生計を立てているのか疑問だったが、ネパールでは政府の仕事をしている人には給料の半分が退職後も支給されるらしい。家屋はカトマンズでよく見かけるレンガ造り5階建ての伝統的な雰囲気のある建物だった。2階には使用人らしい家族が住んでいた。非常に立派なお宅で、豊かな暮らしぶりだったが、停電に遭遇したり、使用人の子どもが学校へ行かずに仕事をしていたり、日本の生活との違いにとまどうことも多かった。私自身が肌で感じた異文化体験を生徒の異文化理解につなげたい。</p>
8/6	10:30	農場見学	<p>2つの農場を訪問して、互いの違いに驚いた。1軒目の農場を訪れた際は、栽培に対する考えなど、それがネパールの人々の常識ならば、それに合わせた支援でよいのではないかと思ったが、2軒目の農場が成功している現実を見て、何が良いのか分からなくなった。また、栽培方法だけでなく、流通システムにも大きな課題があると感じた。これまで農業の他、水の問題、教育の問題など、いろいろな課題に触れてきたが、いずれも、それらを担う人々の意識が優先されるのが望ましいと思う。長期的な展望や進むべき適切な方向性を持たせることなど、人々の意識改革もまた重要な課題だと感じた。これらのことを上手く用いて、生徒にも長期的な視野を持つことの大切気づかせたい。</p>
8/7	10:30	JICA事務所	<p>日本の技術が細分化、専門家され過ぎてきていて、支援の際、1人で広範囲のフォローができないという話が印象に残った。</p>